
弔いの花開く

鷺原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弔いの花開く

【Nコード】

N4598N

【作者名】

鷺原シュン

【あらすじ】

真6弔花のその後を書いた小説です

さいごあまりにもあれなんで救ってみました

原作で唯一生存していた桔梗を中心に書いてます

（前書き）

この小説には無理やりな設定がいろいろ出てくるのでそういうのが嫌な方はカムバック願います

無理矢理でもおっけー、気にしないという方はそのままどうぞ

「我々は世が世なら各分野で天下を取った人間だ!!」
そう叫び彼、桔梗の意識は失われた

「ん？」

そして彼が目を覚めたのは何処かのベッドの上だった

「っ、頭が痛む、私は一体何を……」

ここまでつぶやいたところで桔梗は頭をXANXUSに撃ち抜かれたことを思い出した

「……ハハーン、我ながらよく生きていたものですね」

「うわあああ！」

「!？」

突然聞こえた悲鳴に何事かと振り向いてみると、隣のベットには彼の仲間であった真6弔花のデイジーが寝かされたまま、発狂していた
「デイジー、やはり生きていましたか、というかなぜ発狂しているのでしょうか？」

彼が疑問に思っている間もデイジーは「手錠が……手錠が……」
と、しきりにつぶやいていた

しばらくすると部屋のドアが開き二人の男が入ってきた

「お、目を覚ましたか」

「あ！こいつまたうなされてやがる、こりゃ立ち直れないっすね」

一人は銀髪に鋭い目つき、もう一人はオレンジ色のツンツン頭に毛糸の手袋、そして銀髪の男は嵐の、ツンツン頭の男は大空のリングを着けていた、しかし

「（ボンゴレリングではない、どこにでもあるBランクのリングだ）」

桔梗はその二人に見覚えがあった、しかし記憶より大人びている、

ということとは

「この時代の沢田綱吉と獄寺隼人ですか」

「そういうことだよ、元ミルフィオーレファミリー雲の守護者、桔梗」

「ハハン、そういうことですか、どうやら私が気を失ってる間に10年前の沢田綱吉たちは過去に帰ったようですね」

その後部屋の脇に置いてあった丸い椅子に沢田綱吉が腰かけ、獄寺隼人は今デイジーを取り押さえている

「さて、やっぱり君にも真6弔花としての記憶が残っているんだね」

「？わけのわからないことを」

唐突にツナが発した言葉に戸惑う桔梗、まある子ばれーのがよみがえっていたとき彼は既に生死の境をさまよっていたのでわからないのも無理ないが

「過去の僕たちが白蘭を倒したことで、白蘭の悪事なんかが存在しなかったことになってる、おれたち一部の人間を除いてミルフィオーレの出来事を覚えてる人間はいないんだ、実際野猿と太猿が元ミルフィオーレ第3部隊の人間に確認を取ったところ、その人たちは一連のことを覚えていなかった、何て言ったっけな？タ、タ……………」

「タイムパラドックス、ですか？」

「そう、それ、ところが君たちは覚えていた、そこでおれたちボンゴレファミリーが君たち保護した、ってわけだ、もっとも、ボンゴレでも一部の人間しか覚えていないけど」

おかしい、この男の言ってることはわかった、しかし一つだけ腑に落ちないことがあった

「君たち、とは一体？」

桔梗のほかに真6弔花には横でうなされているデイジーと、トリカブト、ザクロ、ブルーベル、GHOSTといった仲間がいた、しかし……………」

「デイジーは話が聞ける状態じゃない、他は……………」

「ん？ああ、言ってなかったね、君たちからは何も消えてなかったわけじゃないんだ、一つだけ消えた………というより戻ってきた、って言ったほうが正しいかな？」

「それは一体どういう」

そこまで行ったところで部屋に何かが駆け込んできた

「桔梗おおおお！よかったー！ー！」

そう叫びながら、桔梗本人に突進して

「つつ、一体？」

何かが突進してきたことでベットから転げ落ちてしまい不覚にも頭を打ってしまった桔梗だったがその突進してきたものの正体を見て驚いた

「ブルーベル！なぜ」

そこにはGHOSTに炎を吸われて死んだはずのブルーベルがいたからだ

「一つだけ消えていたもの、それはGHOSTが吸収した炎だったんだ」

ツナの言葉で余計にわけがわからなくなる桔梗だった

「これはあくまで仮説なんだけど、白蘭が消滅した時、GHOSTが奪った残りの炎が散って、持ち主のところに帰った、その炎を受けて彼らはよみがえったんじゃないかな」

「奇跡、というかそんなことがあり得るのでしょうか」

「白蘭の存在はタイムパドックスで消滅している、GHOSTが別のパラレルワールドからつれてこられたもうひとりの白蘭だったなら」

「なるほど、GHOSTという存在もなかったことになり、彼が吸収した炎が持ち主に変えることも十分あり得るというわけですね」

「もつとも、元に戻ったのは君たちだけで、巻き添え食らったレヴィの匣兵器は元に戻らなかったんだけどね（おかげで代わりの匣用

意するのにどれだけ苦労したか」

「では、ザクロも」

「ああ、彼も時期に………」

「桔梗！無事だったんだな！」

「……………来ると思う」

もう来てます

「で、我々のリングと匣は？」

「マーレリングは没収させてもらったよ、匣も修羅開匣に使われていたものだけ処分させてもらった、あ、跡は残ってないから大丈夫だよ」

そういえば体に違和感が残る、左胸に埋め込まれていた匣がなくなつたためか

「誤解しないでほしいけど修羅開匣の匣を外したのはあの力が危険すぎるからなんだ、ぼくもディーノさんや正一君からきいたぐらいのことしか知らないけど」

確かに修羅開匣の危険性はGHOSTの一件で痛感した、全身匣兵器であるがために炎を吸い取るGHOSTの影響をともに受け、桔梗以外にその場にいた二人は死んでしまった

「それと、肉体にも負担をかけてみたいでしばらくふらつくから気をつけて」

先ほどの違和感はそのせいかな、桔梗は頭を抱えた

「で、君たちの今後についてなんだけど」

いまだにうなされているデイジー以外はツナの周りに集まった
どうやら桔梗が目覚めたのは他二人よりあとで、ご丁寧にも先述のこと以外の話は桔梗が目覚めてからということで、二人には先ほどのことくらいしかきかされていなかったようである

「バーロー、誰がてめえの話なんぞ」

「いいからきいて、とりあえずデイジーはボンゴレの息のかかった

精神病院に搬送することになったから、それと君たちについてなんだけど、修羅開匣の力を失ったとはいえ、実力は折り紙つきだし、ここにいてもらうことにしたよ」

「はあ！何言つてやがるバーロー、陽はおれたちにボンゴレに入れつて言いてえんだろぅが」

「私は……いいよ」

ザクロが怒鳴ったところにブルーベルが割って入った

「ハあ！てめえ何言つてやがる、とうとう完全に逝かれたかこの電波」

「誰が電波よ！わたしは、うれしいの」

「うれ？何を言つて」

「少し静かにしてくださいザクロ」

「な、桔梗お前まで」

「どういふことかくらい聞いてあげましょう」

桔梗がなだめしぶしぶ席に座りなおすザクロだった

「わたしね、怖かったの、GHOSTに炎を吸われて、頭の中ぐちゃぐちゃになって、どうしていいかわからなくなった」

「うあああ」

頭を抱えながら叫び出すブルーベル、意識が戻った途端、GHOSTに炎を吸いつくされた時の恐怖がよみがえり、パニックを引き起こしたのだ

そんなとき、彼女の体が突如ベッドに押し戻された

「落ち着いて、もう怖がることはないんだ、安心していいんだ、君たちはもう、何も怖がらなくていいんだ」

彼女を取り押さえたのはツナだった、そして右手に着けていたリングにオレンジの炎をとめた

すると大空の調和の炎が彼女の体を包み込んだではないか

「もう、大丈夫だから」

「そしたらね、怖い気持ちがなくなって、白蘭に会った時みたいに、心から安心できた」

「一体何をしたんですか、普通に説得してるようにしか聞こえませんが」

「ああ、大空の特性は調和だろ、もしかしたらその力で彼女の心を「調和」して恐怖を無くすことが出来るんじゃないかと思って、うまくいってよかった（デイジーはうまくいかなかったけど）」

「雨属性の鎮静で落ち着かせる、という考えはなかったのですか」「それも考えはしたさ、でもそれじゃ、彼女を安心させることはできない、いったん落ち着きはしても恐怖は残ったままだからね」

「……………ハハン、敵に情けをかけますか、甘いですね、ボンゴレデ―チモ」

「骸や雲雀さんにも同じこと言われたよ」

「ったく、やってられるか、おれは好きにさせてもらっぜ」

「わかりました」

「ほらな、電波は勝手に……………」

「私も残るとしましょう」

「っておiiiiiii！どうしたんだよ桔梗！」

「確かにこの男はマフィアのボスとは思えぬほど甘い、むしろ一般人から見ても甘い方です」

「（おれそんなに甘いか、よく骸とかに言われるけど）」

「ですが、そのような男だからこそ、引きつけられる“何か”があるのでしょうか、私はそれが何か知りたくなりました」

「（要はおれに興味がわいたってことなのかな？）で、君はどうするんだい、ザクロ」

「ucci、わかったよ、残ればいいんだろ、残れば」

「よし、交渉成立、じゃあこれを渡しておくよ」

そう言っつてツナは三人に何かを手渡した

「にゅん？」

「リング、ですか」

「どういっつもりだ、バーロー」

「マーレリングほどじゃないけど勘弁してくれ、あそこまでのリングなんてそう手に入るものじゃないし、それとこれも返しておくよ」
そう言って彼が取り出したのは三人が修羅開匣とは別に持っていた匣兵器だった

「もう仲間だからね、君たちの部屋を用意できないか手配しておくよ」

「…………… 本当に甘い男だ」

（後書き）

いかがでしたでしょうか

GHOSTと大空の炎に関しては無理やりだとわかってるので深く突っ込まないでもらえると幸いです

また気が向いたら何か書くつもりなのでその時はよろしく願います

ただその時はもしかしたら他のジャンルかもしれませんが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598n/>

弔いの花開く

2010年10月9日10時57分発行